

## 月山 現地審査報告書(公開版)

【日程】2016（平成28）年8月2-4日

## 【現地審査員】

阿部 宗広（日本ジオパーク委員会委員）

渡辺 真人（アジア太平洋ジオパークネットワーク諮問員）

鳥越寛子（糸魚川ユネスコ世界ジオパーク）

## 【主な現地対応者（所属）】

小川 一博（西川町長、推進協議会長）、渡部 秀勝（戸沢村長、推進協議会副会長）、原田 眞樹（庄内町長、推進協議会監事）、加藤 正美（大蔵村長、推進協議会監事）、山本 益生（鶴岡市副市長）、田村 圭司（国土交通省東北地方整備局 新庄河川事務所長）、下本 敬己（環境省羽黒自然保護管事務所、アドバイザー）、八木 浩司（山形大学地域教育文化学部教授、アドバイザー）、川村 晃（近畿日本ツーリスト東北）、小林 孝一（大蔵村産業振興課観光アドバイザー、近畿日本ツーリスト東北）、奈佐 國男、橋本 智雄、坂口 巧、児玉 勝義、島貫 徹、森 保二、田中 秀樹、伊藤 基博、石垣 達也（以上9名月山マイスター）、太田 一（山伏）、工藤 時雄（内町風車村 村長）、志田 靖彦（月山志津温泉・変若水つたや、月山マイスター）、柿崎 雄一（肘折温泉・つたや肘折ホテル）、後藤 忠勝（西川町政策推進課長、推進協議会事務局局長）、以後、推進協議会事務局員 上林 喜博（鶴岡市羽黒庁舎観光商工室室長補佐）、齊藤 貴幸（庄内町商工観光課立川地域観光振興係長）、佐藤 成紀（庄内町商工観光課長立川地域観光振興係）、柴田 知弘（西川町政策推進課企画調整係長）、齊藤 麻美（西川町政策推進課企画調整係主事）、中島 輝美（大蔵村総務課政策推進係政策推進主査）、早坂 直彦（大蔵村総務課政策推進係長）、畠山 伸晃（戸沢村総務課政策調整係主事）

## 【審査日程概要】

<8月2日：1日目>

鶴岡駅 審査員到着、羽黒山（羽黒山五重塔）、出羽三山神社（三神合祭殿）、月山ビジターセンター、月山高原牧場、湯殿山神社本宮（ご神体）、志津（地すべり）、首長との懇談

<8月3日：2日目>

月山中腹（姥沢）、月山リフト上駅周辺、県立自然博物館（ブナ林散策）、弓張平公園、大井沢、本道寺、間沢、肘折（希望大橋）、事務局との中間協議、住民ヒアリング

<8月4日：3日目>

小松淵、地蔵倉、滝の沢（棚田）、鼻欠倉（土合トンネル）、船番所、最上川船下り、最上川さみだれ大堰、風車群、響ホール（講評、記者会見）

## 【現地審査のまとめ】

### 1) 月山ジオパーク構想地域の概要

月山ジオパーク構想地域は、山形県のほぼ中央に位置し、地域のランドマークである月山を取り囲む鶴岡市の一部、西川町、大蔵村、戸沢村の1市2町2村からなる総面積1,500km<sup>2</sup>のエリアである。月山は隆起した出羽丘陵の西端にできた火山で、山体西側の斜面は断層と隆起活動によって崩壊し流れ山をつくり、山麓はいまだ地すべりで動いている。崩壊し切り立った西側斜面には日本海の季節風が吹きつけ、冬季は世界的な豪雪地帯となる。出羽丘陵を川が侵食してできた最上峡では、渓谷を吹き抜けた悪風「清川だし」が最上川の水運を発達させ、現在では風力発電の資源となっている。

磐梯朝日国立公園に指定されている月山を中心に、地域は古来より出羽三山信仰の聖地として敬われてきた。羽黒山の山伏の案内のもと、霊が集まる月山で一度死に、湯殿山で生まれかわるとされている出羽三山信仰は、周辺の地域住民の意識に深く根付き、月山は山麓の地域住民の意識に常にあり、多種多様な自治体を一つにまとめる役割を果たしている。

月山ならではの資源は多くあり、月山という旗の元「雪、風、大地のおそれとめぐみ」をテーマに活動しているが、月山ならではのジオストーリーの構築が不十分で、見どころをどう編集して楽しんでもらうかという戦略が5市町村合意のもと整理されていない。また、ガイドや関係団体のジオパークならではの視点で伝える観点が不足しており通常の観光旅行との差異がない。解説版の設置や既存解説板の改良、パンフレット類の整備といった受入面の整備はほとんど進んでおらず、具体的な戦略・計画のもと活動の積み重ねが必要である。

### 2) ジオサイトと保全

月山山域は磐梯朝日国立公園に、最上峡一帯は最上川県立自然公園に指定されている。山地の多くは国有・公有林となっている。また、一部ジオサイトや見どころは、景勝地、棚田百選、平成の名水百選、重要文化財等に指定されている。従来からの見どころや文化・歴史関係の史跡等はなんらかの指定を受けているものが多い。月山では、環境省の月山ビジターセンターを中心にして環境保全団体が主導するボランティアや研究団体による保全活等が行われている。

### 3) 教育・研究活動

月山マイスター養成という形で普及教育活動が熱心に進められている。平成23年度から山形大学による生涯教育事業および地域連携事業として「月山マイスター講座」が実施され、これまでに初級100名、中級20名の月山マイスターが誕生しており、平成27年度からはジオパーク推進協議会によるガイド養成講座がマイスター講座と連携して展開されている。また、地域住民への学習会は平成25年から計13回開催されている。月山マイスターの多くが非常に高度な地理・地質の知識を有しているほか、歴史文化にも造詣が深いガイドが多数存在している。

一方で、地元の小中学生を対象としたジオパーク教育活動は、中学生の親子学習で防災学習を行う程度で、学校向けのジオパーク教育活動は平成28年から展開していく計画となっており、長期的視野のもと月山ジオパークの学習活動体制を構築していく必要がある。

#### 4) 管理組織・運営体制

月山ジオパーク推進協議会は、西川町長を会長とし（戸沢村長が副会長、庄内町長と大蔵村長の2名が監事）、県、市町村教育委員会、研究・整備団体、商工・観光関係団体、ガイド組織、自治体等の約45の団体で構成されている。同推進協議会事務局は、新たに雇用したジオパーク専門員（植物専門）1人を含む事務局11人体制で、事務局は西川町政策推進課内に設置されている。地質の専門員がおらず山形大学教授と月山マイスターがその役割を受けている。

幹事会のもと、4つの部会（環境整備・防災部会、学術研究・ガイド部会、商工・観光部会、教育・文化部会）が設けられているが、実際に動いているのは学術研究・ガイド部会のみで、ガイド事業以外は未整備なことが否めない。今後、推進協議会を機能させ5市町村の連携により効果をあげていくために、全体を俯瞰しながら戦略的に事業を企画実施していくことのできる強力なコーディネータの存在が不可欠である。

#### 5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズムについて

平成27年度に、豪雪をテーマとするインバウンドジオツアーを実施し（外国人506名、首都圏480名）、その受入のために、旅行エージェントや観光協会、民間施設が合同でジオ学習や受入研修会を開催している。インバウンドツアーを企画するために、観光アドバイザーとして近畿日本ツーリスト東北から2名がジオパークに関わるなど、インバウンドを核にしてジオツーリズムを展開していくことに力をいれている。そのため一般向けのジオツアーの実施実績は乏しい。雪をテーマとしたツアーを広い意味のジオツアーととらえることは可能であるが、ジオパークが求める地質遺産を活用したジオツアーとは言えない。また、実施されたインバウンドジオツアーのDVDも観賞したが、エコツーリズムなどのニューツーリズムの要素があまりなく、ほとんど一般観光と言わざるを得ない。これらは月山ジオパーク構想の伝えたいテーマが熟考されていないことに起因すると考えられる。

全般的なジオツーリズム受入体制も未整備である。ジオツーリズムを発展させるためには、各サイトにおいてジオツーリズムの視点で伝えるべき内容を明確にし、それを易しく伝える手法をガイドが習得するとともに、解説版の設置や既存解説板の改良、パンフレット類の整備に関する具体的な計画を早急に策定・実施する必要がある。拠点施設として、月山ビジターセンター、山形県立自然博物館等を視察したが、ジオパーク施設としての可視性、機能は十分とはいえない。出羽三山信仰を中心とした月山の特異性を多くの人々に伝えるのにジオパークがベストな方法であるかどうかとも考慮の余地がある。「日本で最も美しい村連合」「日本遺産」とジオパークの関係性を今一度整理し、運営のしやすさと来訪者から見たときのわかりやすさを考えて整理する必要がある。

#### 6) 国際対応

英語の概要パンフレットは作成されているが、案内板、解説板等の外国語表記は従来から設

置されていたもの（最上川ラインくんだり船番所等）以外には、ほとんどみられなかった。インバウンドジオツアーを推し進めていることから、外国語標記について、解説版やパンフレット類の整備計画に含めて考えていく必要がある。

## 7) 防災・防災教育

月山周辺地域はほとんどが地すべり地区であるとともに、雪崩が頻繁に発生しているため、国、県による防災工事実施（大蔵村での、国の地すべり防止のための排水工事）やハザードマップが作成され、集落単位で自主防災組織が設置されている。しかし、ジオパークがうまく連携しているとは見えない。国土交通省新庄河川事務所はジオパークへ協力的であり、当事務所と連携しながら、年1回の中学向け防災学習にとどめず、小中学校等における防災教育をすすめることが望まれる。

## 8) 結論

月山ジオパーク構想地域は、隆起した出羽丘陵の西端にでき、西側の山体が大崩壊した特異な環境を作り出した月山を中心に、歴史と神仏習合の文化が受け継がれた出羽三山信仰と、最上川と風、カルデラ底の温泉等を見どころとする地域である。地域として重要な地質遺産はあり、日本ジオパークとしての資源は十分に有している。

月山を核として、周辺の5市町村が連携しジオパークによる地域振興や郷土愛の育成に大きな期待が寄せられ、高度な知識をもったガイドの育成がすすむとともに、域内の環境省、国土交通省、旅行会社等との連携のもとジオパーク活動が推進されている。

一方、月山ジオパークに住む人々が伝えたいと思われるメッセージは設定されたテーマ「雪、風、大地のおそれとめぐみ」では表現しきれていない。テーマは必ずしも一つである必要があるだろうか。また、全体として月山ならではのジオストーリーの構築が不十分といわざるを得ず、月山の見どころをどう編集して楽しんでもらうかという戦略が5市町村合意のもと整理されていない。その他、具体的な戦略に基づいた解説版の設置や既存解説板の改良、パンフレット類の整備、関係者やガイドのジオ的視点を取り入れた教育活動の実施、ツーリズムの展開も発展途上にあることから、現地審査員は月山ジオパーク構想地域の日本ジオパーク認定を見送ると結論づけた。